

音 楽 科

圓城寺佐知子・松前良昌

I 研究の経緯

1 昨年度までの研究

本校では、「小・中学校9年間の学びがつながる授業づくりのあり方」というテーマのもとで、小学校から中学校への学びや育ちの円滑な移行という課題に応え、子どもたちの学びの質が高まるためにどのような授業づくりを進めるのかを研究をしている。ここで言う「学び」とは生涯通して行われるものと捉え、学びの連続性を重視している。これは音楽科の目標である「音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる」（学習指導要領中学校1学年）、「生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」（学習指導要領中学校2・3学年）とも通じている。そして、小学校5・6学年および中学校1学年であるⅡ期（本校研究主題参照）においては、いわゆる中1ギャップの軽減も含めた授業展開に焦点をあてて研究を推進することにした。また、中学校2・3学年であるⅢ期においては、「概念の深化をめざした授業構成と教材の工夫」に焦点をあて、思考力・判断力・表現力といった高次の学力を育成する授業づくりというテーマで研究を推進している。

音楽科で学習したことを社会や生活に直接的に活かすことができた実感するのは容易ではない。しかし、そのことは生涯にわたって豊かに人生を送るうえで有意義なことである。だからこそ、よりよい表現を求め、自分の思いが表現できたと感じさせることが不可欠と考えている。その基本的要件として音楽的な感受性を高め、音楽的技能を身につけることは重要である。

Phillips（吉富ほか訳、2007）は、「優れた歌唱のための基礎的なスキルが思春期以前に確立されていなかったら、声の開発に関する教育プログラムを第7学年（およそ中学1年）で始めるべきである。」と述べている。したがって、短時間で効果的に技能が向上する指導法を開発すれば、授業時間数が少ない中で、音楽的技能を用いてよりよい表現ができたとの実感や達成感をより多くもたせることが出来ると考えられる。

そこで、本校音楽科においては、表現分野における高次の学力を育成する授業づくりに着目し、さらにこれまで培ってきた感性を活用しながら表現を工夫したり、基礎的な音楽技能を身につけさせたりすることに視点を置いて、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期それぞれの段階に通ずる授業構成と教材の工夫について、基礎研究をすすめることとした。具体的には、児童・生徒一人ひとりが自分の思いや意図を深め、音楽で表現することができる生徒の育成をめざし、実践的研究を行った。その結果、昨年度の研究授業では次のような成果を得ることが出来た。

- ・小学校2年生において、楽曲の情景を一枚の絵として想像しながら歌ったり、旋律やリズムの違いを感じながら歌うことにより、楽曲の雰囲気合った歌い方や強弱を工夫して表現することができていた。
- ・小学校2年生において、パートナーソングを歌う際には、それぞれの曲の違いを感じて歌うことができていた。互いの声を聴きやすい立ち方や歌い方についても児童から意見が出され、自分たちで声を聴き合うことができるように考えることができていた。
- ・小学校6年生において、変声期について学習した結果、個々に合った声域で歌うことへの理解が生まれ、音域が合わず、声を出さずに口だけ開けていた男子児童が堂々と歌うことができるようになった。

・小学校6年生において、グループで考えた強弱をつけて全員で歌うことから楽曲を表現する達成感を感じることができていた。今回の曲で学習した内容を他の曲でも生かしたいという意見も多数あったことから、豊かな表現を求めることへの関心は高まったといえる。

・中学校3年生においては、生徒が主体的に練習していた。これは、1年生で基礎的な技能の定着を図るとともに様々な練習方法を身につけさせ、2年生で少しずつ自分たちで考え、運営させたことによるものと考えている。この1・2年生でつけた力がアイテムとなり、生徒はお互いに客観的な意見を述べるとともに、指揮がわかりづらい箇所を指摘したり、伴奏者は音程が下がったらの確に1音弾くなど、美的な価値判断ができていた。

一方で、次のような課題もあった。

・曲想に合った歌い方を考えて歌うことも大切であったが、異なる楽曲を合わせて歌う際には表現の仕方を変えて歌う必要が生じた。

・合わせて歌おうとする際に、つられまいとして大きな声で叫ぶように歌う様子が見られた。

・豊かな表現を求めるためには、表現方法を学級全体で確認したり、音楽を形づくっている要素に着目したりできるような指導を継続して行う必要がある。

・自分の思いや意図をもたせるためには、いろいろな種類の音楽に触れる機会をもつことが大切である。

そして、これらの結果から、以下の2点を改めて認識することができた。

・発問や助言の内容、そのタイミングや抽象度などには、発達段階に応じて違いがあること。

・自分の思いや意図を演奏に生かすための音楽的スキルを始めたとする手段を、児童生徒に身に付けさせることの重要性。

2 今年度の研究

今年度は、研究内容を表現領域の中でも歌唱表現に焦点化して、小・中学校の学びがつながる授業のあり方を探る。

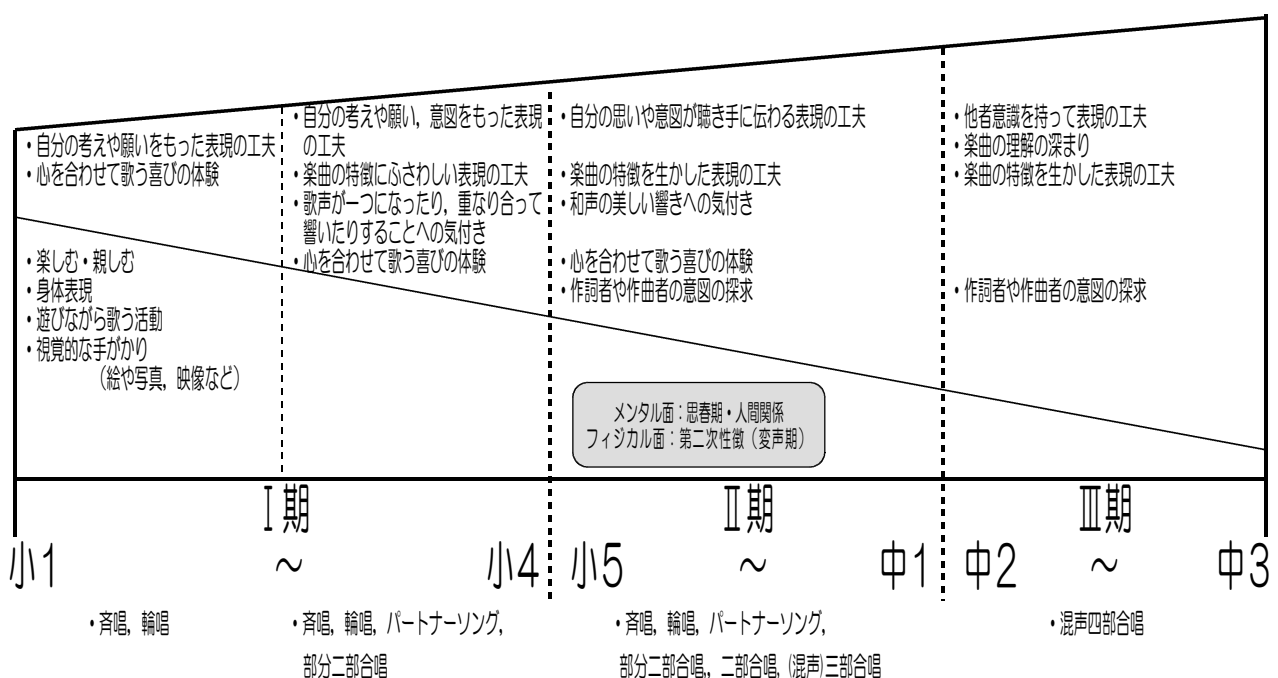


図1 音楽表現でめざす学び文化(歌唱表現の場合)

本校音楽科では、低学年から音楽活動を重視し、活動を通して、自分の思いや意図を演奏に表す方法の一つひとつ身に付けさせることが重要であると考えている。学年が進むにつれて、身に付けた表現方法を選択し活用できる児童・生徒を育てるために、指導者が適切な場面で適切な支援を行うことができるようにしたい。また、身に付けた音楽的表現や技能などを曲のどの部分でどのように利用するかを自ら判断し、演奏に生かすことができるようにしていきたい。さらには、効果的に音楽的技能などが向上する指導法の開発を試み、その有効性について研究していきたいと考えている。

よりよい合唱表現を求めていくための基本的要件として、音楽的な感受性を高め、音楽的技能を身につけることが重要となってくる。いくら自分の思いや高い目標をもったとしても、それを表すための音楽的技能がなければ、表現の広がりや深まりは期待できない。児童・生徒自身には手応えが感じられず、向上心の高まりも期待できない。したがって、Ⅱ期では何のために音楽的技能を身につけようとしているのかを理解させるとともに、その音楽的技能を用いてよりよい表現ができたとの実感や達成感をもたせる必要があると考えられる。また、Ⅲ期では、身につけた音楽的技能を曲のどの部分でどう利用するかを自ら考え、判断し、表現に活かすことができるようにしていくことが必要と考えられる。ただし、そのことは音楽的技能を身につけることに偏重することを意味していない。必要なのは、年間カリキュラム上からも限られた時間で効果的に音楽的技能が向上する指導法の開発であると考えている。

3 中学卒業時のめざす生徒像に向けた授業仮説

一人一人が自分の思いや意図を深め、音楽で表現することができる生徒

- ＝より豊かに表現しようとすることに興味があり、意欲的に活動する
- ＝作品に込められた作詩・作曲者の思いをくみ取り、自分なりに解釈している
- ＝より豊かに表現するための音楽的技能を身につけている
- ＝音楽的技能をどう活かすかを自ら考え、判断し、表現に活かしている

上記のめざす生徒像に向けて、本研究では特に「歌唱表現」に焦点を当てて授業仮説を設定した。

Ⅱ期（小学校5年生～中学校1年生）

Ⅱ期の児童は、これまでの音楽経験で得た音楽表現など、いろいろな音楽表現から発想を得て、即興的に表現しようとする時期である。互いの表現を聴き合いながら、同じ歌詞でありながらも異なる音階で成り立っている旋律を聴き取り、曲の明暗や音階固有の雰囲気を楽しむながらよりよい表現を目指す意欲が高められるのではないだろうか。

Ⅲ期（中学校2～3年生）

Ⅲ期の生徒は、楽曲の理解を深め、曲想を活かした表現を考えることが出来るようになってくる時期である。そのため、歌唱指導においては、生徒の状況に応じた指導によって、歌詞の意味や内容、曲想、音楽を形づくっている要素を根拠として、身につけた音楽的技能を作品のどの部分でどう利用するかを自ら思考・判断しながら、自分の思いや意図を聴き手に伝えるような豊かな表現ができるのではないだろうか。

Ⅱ 本年度の研究計画

1 研究の目的

Ⅱ期・Ⅲ期それぞれにおいて、上記の仮説に基づく授業を行うことで、中学校卒業時には思考力・判断力・表現力のような高次の学力をもとに「一人一人が自分の思いや意図を音楽で表現することができる生徒」になるのではないかと考え、研究を推進していく。

Ⅱ期では、一つの楽曲を通して、異なる2つの旋法で歌唱していくことにより、陽旋法と陰旋法の旋律の違いに気付き、曲の雰囲気合った表現を工夫しようとする意欲が高められるのではないかと、いう授業仮説を検証する。

Ⅲ期では、歌唱の授業において、自ら発声や音程を確認するための方法が、正確な音程の感覚や楽曲に適した発声法などの音楽的技能を高めるのではないかと、いう授業仮説を検証する。

2 研究の方法

(1) 以下の検証授業を実施し、授業前後の児童・生徒にアンケート調査を実施したり、児童・生徒からの発言、記述や演奏を分析したりすることによって、授業仮説を検証する。

①Ⅱ期 小学校5年

題材名「楽曲の雰囲気に合わせて歌い方を工夫しよう」

子もり歌を通して、日本の音階である陽旋法と陰旋法の旋律の明暗の違いに気付き、速度や強弱、対象を変化させることにより、思いや意図をもって表現させる。

②Ⅲ期 中学校3年

題材名「合唱表現を工夫しよう」

歌唱指導において、自ら音程や発声を確認する方法を身につけさせることにより、効果的に音楽的技能を高め、その技能をもとに、楽曲に対する自分の思いや意図を豊かに表現させる。

(2) 検証方法

授業内容や児童・生徒の実態に応じて、次のいずれかを実施する。

- ・児童・生徒に事前事後アンケートを実施し、分析を行う。
- ・児童・生徒の演奏を録音し、周波数分析や第三者による客観的評価などを行う。